

友のお墓に詣でる

お彼岸から2日後の9月25日に、私は初めて多磨霊園に行きました。その目的は、1年以上前に亡くなった古い友人のお墓に詣でることでした。その友人とは、高校時代にとくに親しくしていた中村淳二君で、今回のお墓参りの同行者はやはり高校時代からの親友星野眞君でした。

今回のお墓参りに至るまでの経緯は、次のようなものでした。去る7月初めに、私は今年1月に受け取った年賀状について気になっていたことをチェックしました。それは、中村君からのものがなかったのではないかということでした。調べた結果、やはり中村君からの年賀状はありませんでした。それで、星野君が何か知っているかどうか、メールで問い合わせました。星野君からの返事によると、昨年2008年4月に単なる様子伺いの手紙を送ったところ、その2箇月ほど前に中村夫人が死去したことを知らせてきたので、星野君は弔問の手紙を送り、それに対しても中村君から返事がもらったが、それ以後のことは知らないとのことでした。

私は、中村君に電話してみようと思いましたが、7月から8月にかけて、しなければならないことがあり、それを済ませてからにしようと思って、放置していました。

8月8日になって、星野君から次のようなメールが届きました。

『田隅 兄 先月、中村君に暑中見舞いを送った処、本日、長女の方から返信が有り、

同君は既に昨年8月11日に心筋梗塞で永眠された由。知らぬ事とは言え、驚愕、慟然、冥福を祈るのみ。以上、取急ぎお知らせ致します。星野』

これは、私には大きなショックでした。この数年間は、年賀状のやり取りくらいしかしてはいなかったものの、中村君とは50年以上にわたる付き合いがあり、とくに、彼は私の結婚について相当深く関係していたのです。その彼の死をこうも唐突に突きつけられるとは、夢にも思っていませんでした。

私は、直ちに星野君に電話して、中村君のご長女に、彼のお墓がどこにあるか尋ねてくれるよう頼みました。その結果、お墓は多磨霊園にあることが分かりました。それで、星野君と私は、お彼岸を過ぎて涼しくなってから、一緒にお墓参りをすることにしました。

中村君のお墓は、広い多磨霊園の中央よりも少し東北側にあり、他の墓よりも大きいくらいの墓域の中にありました。横長の墓石に「中村家」とだけ彫ってあり、墓誌に相当するものは見当たりませんでした。墓石の後ろには灌木が茂っていましたが、それを掻き分けると、「昭和58年中村淳二建之」と刻んであることが読み取れました。これで、このお墓が中村君夫妻とご両親のものに間違いのないことが分かりました。

中村君の父君は医師でしたが、中村君が高校生になる前に自動車事故で死去されていました。星野君と私は中村君の母君には何度も会ったことがありました。私は、中村夫人に一度だけ会ったことがありますが、それは中村君が味の素株式会社のシカゴ駐在員だった今から20年くらい前のことでした。当時、中村夫妻はシカゴ市内の高層住宅のしゃれた部屋に住んでいました。

彼岸過ぎとはいえ、好天の強い日射しを受けながら、私たちは墓石に向かって手を合せました。

昨日になって、私は日記を調べて、最後に中村君に会ってから既に7年以上が経過したことを知りました。2002年6月9日夕、中村、星野両君と私の3人は、中村君の世話で、銀座あずま通りにあるレストラン Lintaro で会食し、Languedoc 産の美味しいワインとフランス料理を楽しみました（因みに、このレストランは今年7月に閉店）。

このとき、中村君は、夫人が肝硬変で入院していたが、一応持ち直したと語っていましたが、このことを私はすっかり忘れていたのですが、今になって、夫人が昨年初めに亡くなった原因は肝臓関係の不調にあったのだらうと気付きました。3人で会食してから1年か2年以内に、こちらから中村君にコンタクトしておくべきでした。「君子の交わりは淡きこと水の如し」といいますが、私たちの交わりは淡きに過ぎたようです。残念ながら、それは、今さらどうにもできないことなのです。（おわり）